



相ノ木っ子だより

令和元年度
学校だより
2月号
上市町立相ノ木小学校

自分が変わるきっかけ



「ここが、職員室だよ」「せーの」「こんにちは」

学校案内をしている途中、5年生の子供たちが来入見と声をそろえ、職員室にいる先生方に大きな声で挨拶してくれました。体験入学で来入見をしっかりと世話していた5年生。学校案内だけでなく、相撲やなわとびの実演やクイズを取り入れた楽しい学校紹介等、やさしく、ていねいに来入見と接していました。でもそこに至るまで、5年生はいろいろ苦勞してきました。

5年生は、周りのことに注意を向けたり、気遣ったりできる子が多い反面、やや消極的で、人前で表立って行動することがあまり得意でない子も少なくありません。就学時健診のお世話や2度に渡る保育園訪問と、5年生は来入見と関わってきましたが、積極的に声をかけることができなかつたり、挨拶の言葉が小さかつたりすることがありました。今回の体験入学においても、何度も何度も迎える練習をし、徐々に気持ちを高め、自信を付けていきました。そういった積み重ねが、本番での意欲的で堂々としたお世話する姿につながったのだと思います。味わってきた苦勞やもつことができた自信を生かし、この後の卒業を祝う集会等の行事でも活躍し、きっと来年度素敵な6年生集団になっていくことでしょう。

思い返すと、これまでわたしが携わった子供たちも、5年生の3学期が大きな成長の転機となっていました。まだまだ幼さが残り、リーダーとして学校を引っ張っていけるのだろうか心配していた教え子たちも、5年生3学期の行事等を経ると、見違える程の変容を見せてくれました。また、2年生の算数科九九の学習による基礎定着・意欲向上や、4年生のクラブ参加による話し合いの質の変化等も同様のことが言えると思います。子供たちの発達段階と学習経験が合致することで、子供たちの中で大きな変化が見られるものです。とは言え、発達段階には個人差があり、なかなか変わることができない子も当然います。そう考えると、学習や行事を通して集団としての高まりを促すとともに、個人内での成長をしっかりと見届けていく必要があります。わずかな成長であったり、他の子とは違った時期での変容だつたりするでしょうが、その子の変化を見取り、言葉にしてあげることで、自分が変わったことに子供は気付くのではないのでしょうか。

そして、変化を自分で自覚することで、さらに大きな成長につながっていきます。それまでは何気なく行っていた行事や学習に意味を見出すことができるようになるのです。わたしたちも、子供の頃は意識して学んではいませんでした。周りから言われて、強いられてやっていたことが多かつたと思います。でも、自分の変化に気付くきっかけがあると、学びの意味を見出し、学びの楽しさを味わうことができるようになります。「あ、わたしって、こんなことができるようになったんだ」「ぼくには、こんなよいところがあったんだ」「〇〇学習は、こんなことに使われているんだ。すごくためになったよ」「〇〇の勉強っておもしろいな」そんな思いを抱けるきっかけをつくってあげたいと考えます。

わたし自身も、自分はその時変わったんだなと思い起こせることがいくつかあります。小六の通知表の担任コメント、中二の中間考査の番数、初任教員の校長からの言葉等、今も振り返ることができる変化であったと感じます。ぜひ子供たちにも、「自分はその時変わったな」と将来思い起こせるような瞬間をもってほしいです。

アメリカの盲目のスーパースター、スティービー・ワンダーは、かつて目が見えないことで強い劣等感をもってたそうです。小学生のある日、理科の実験中にネズミが逃げ出し、その居場所を誰も見付けられずにいました。そんななか、担任の先生はみんなに静かにするように言い、スティービーに探すよう頼みました。彼は居場所を探し出し、見事にネズミを捕まえたのです。後に彼は、次のように言っています。

まさにそのとき、先生が自分のもつ能力を認めてくれたそのときに、自分の新しい人生が始まった。

そして彼は、すばらしい聴力と絶対音感を駆使して数々のヒット曲をつくりだしました。わたしたちも、スティービーの担任のように、一人一人の子のよさや成長をしっかりと見つめ、その子に気付かせていかなければならないと強く思います。そして子供たちには、自分や友達のよさや成長にいつも目を向けてほしいと願います。

当たり前ではなかった日本の四季

3～6年生の子供たちが楽しみにしていたスキー教室を中止しました。非常に残念でしたが、どうしようもなかったことは、ご理解いただけだと思います。スキー場のゲレンデに雪が全然ないために、スキー教室を中止する。初めての経験です。昔と比べてここ数年は、雪の降る回数も減り、積雪量はずいぶん少なくなってきていますが、気温が高く、雪の降らない今年の冬は、とにかく異常です。昔の富山の冬を思い浮かべると、夜中にしんと降っていた雪の量に朝びっくりする、何日間も雪が降り続いて思うように外出できない、毎日雪が降る空はどんよりとして日中でも暗い…、それが今年はどうでしょう。先週ようやく寒波が訪れましたが、1月になってもちょっと遠くの山も近くの田んぼにも雪はなかったですし、スコップやママさんダンプの出番なんて全くありませんでした。春がもう訪れたかのような生活をわたしたちは送っています。

雪による不便を感じずに済んでよかった、鍋に使う野菜が安くてよかったなどと思われるかもしれませんが、こんな冬が今後毎年のように続くとしたら、いったいどうなってしまうのだろうかと不安になってきます。冬眠しない動物がうろうろしたり冬ごもりしない虫が大発生したり、動植物の生態系に大きな影響が出ないだろうか。立山連峰の雪解け水が減ってしまい、湧き水や深層水等にも影響し、富山のおいしい水が枯渇したり、海の幸もとれなくなったりするのではないだろうか。今年の冬ほど、異常気象、地球温暖化を突き付けられたことはないように感じます。わたしたちは、社会の激しい変化に対応でき、生き抜く力を身に付けた子供を育てなければならないのですが、さらに気候の変化にも対応できる力も身に付けさせていく必要が出てきたのかもしれない。

それから、子供たちが冬の寒さや厳しさを体験できなくなってしまうことが心配です。富山の県民性である生真面目さ、我慢強さといったものが子供たちに培われにくくならないか危惧しています。さらに、この暖冬は富山県だけでなく、日本全国であることを考えると、日本人にとって大事な四季をわたしたちは徐々に感じられなくなってしまうのではないのでしょうか。ひたすら暑く、エアコンなしでは過ごせない夏。いつでも、どこでも集中豪雨が起りやすく、時期的な特徴が薄れていきいている梅雨や秋雨。四季から滲み出てくる感性や風情、情緒といったものとそこから生み出される芸術、文化。当たり前のように親しんできた日本の四季が、もはや当たり前のもものではなくなっているのかもしれない。

人と接する時は 温かい春の心

仕事をする時は 燃える夏の心

考える時は 済んだ秋の心

自分に向かう時は 厳しい冬



これは、実業家鮫島輝明氏の「心の四季」です。何かに向かう人の心を四季にあてはめ、「温かさ」「燃える」「済んだ」「厳しさ」それぞれを鮮明にしてくれます。読んだ人によって多少感覚の違いはあるかもしれませんが、一様に想像しやすく、納得できるはずです。昔から日本人は、四季それぞれでの体験を通じてそんな感性を磨いてきているのです。ところが近年、それが感じられにくくなってきたために、四季のよさ、日本のよさ、日本人らしさをだんだんと失ってきつつあるように感じます。

とすれば、子供たちに、五感をフルに使って季節を感じるよう、もっともっと積極的に働きかけていかななくては いけませんね。今考えさせられる、当たり前ではなかった日本の四季。だからこそ、出合えた四季に感謝し、大事にしていきたいものです。

行事予定(2月中旬～3月中旬)

2月17日(月) ノーゲイ・ウィーク(～21日)
21日(金) 体育館ワックス塗布
23日(日) 天皇誕生日
24日(月) 振替休日
28日(金) 教室・特別教室ワックス塗布

3月2日(月) 卒業を祝う週間(～6日)
6日(金) 卒業を祝う集会
17日(火) 卒業証書授与式

